多言語社会スリランカにおけるシンハラ人日本語学習者の言語態度

加　納　　　満*

Language attitudes of Japanese learners of the Sinhalese in multi－lingual Sri Lankan society

Mitsuru KANO

Key words: Language attitudes, Japanese learners, the Sinhalese

1．はじめに

スリランカは，その歴史的・地理的・宗教的要因により，様々な民族（約7割をシンハラ人，2割弱をタミル人が占め，残りをムスリム，バーガー，マレー，ヴェッダーなどが占める）と宗教（仏教，ヒンドゥー教，イスラム教，キリスト教）と言語が存在する複合社会である。言語は，インド・アーリアン諸語に属するシンハラ語（使用話者は人口の約7割）とドラヴィダ諸語に属するタミル語（約2割弱）が公用語として定められている。英語も，宗主国のイギリスから独立した1948年以降も1956年まで公用語であったように，現在に至るまで，政治的，経済的，文化的に重要な言語である。これら3言語とも，教育機関，行政機関で用いることのできる言語として，その使用が認められている。これら主要3言語以外にも，ヴェッダー語，マレー語，アラビア語，ピジン・ポルトガル語，手話などが使用されている。

スリランカと日本との関係は，主に経済援助と日系企業の進出による経済的交流と仏教による宗教的交流が中心となっており，スリランカ人の日本に対する関心は非常に高い。スリランカにおける日本語教育は以前より個人的・私的に行われていたが，1970年代始めに在日本大使館日本語講座が開設され，社会的に日本語教育が認知されるようになった。1978年にはケラニア大学に日本語

原稿受付：平成8年6月19日

*長岡技術科学大学語学センター

講座が開設され，高等教育における日本語教育が始まった。1980年代にはテロ活動の活発化等による大学閉鎖が頻繁にあり停滞したが，90年からは情勢も落ち着き，正常に大学教育が行われるようになった。日本語教育の必要性の高まりを受け，サバラガムワ大学（1992年）とコロンボ大学（1995年）でも日本語教育が開始された。中等教育においては，1974年にAレベル（日本の高校卒業レベルに相当する）の試験科目として日本語が認められ，1984年に初めてデーヴィ・ヴァーリカ校で日本語教育が始まって以来，17校（1996年3月の時点）で日本語教育が行われるようになっている。中等教育における日本語学習者数の増加に伴い，高等教育の日本語教育との連関が重要な問題として浮上してきた。問題の解決策としてケラニア大学では1995年より，日本語科目のAレベル試験合格を日本語講座受講の要件にすることを決めた（但し，プレイスメントテストでAレベル試験合格担当の能力があると判定されれば，受講が許可される）。この処置により，学生の日本語能力の向上と教員養成が可能となる基盤が整ったことになる。今後とも引き続き，教員養成，教材作成・出版などの面にわたって日本語教育を進展させていく必要がある[1]。

スリランカにおける日本語教育は，ここ数年目覚ましい進展が見られるようになり，日本語教育に関する現状が報告されるようになってきた。しかし，スリランカ人の日本語学習の要因に関して調査したものはこれまでなかった。社会言語学では，ある言語に対する態度や意識は，言語使用の選択や言語学習にかかわる重要な要件となると考えられている。本稿の目的は，シンハラ人の日本語学習者を対象に行ったアンケート調査に基づき，その結果をシンハラ人の言語的・社会的背景との関連で考察することである。

2．調査方法・調査対象者

今回，アンケート調査の対象になった人たちは，在スリランカ日本大使館日本語講座とマハラガマ・ナショナル・ユースセンターの日本語講座で日本語を受講しているシンハラ人である。シンハラ人以外の他の民族の学習者は対象から除外した。内訳を見ると，男性は41人（60.3%），女性は27人（39.7%）だった。全て仏教徒である。

表1

僧　侶	世　俗
3人(4.4%)	65人(95.6%)

全員が，経済・政治の中心地であるコロンボ及びその近郊に在住している。階層意識については，表2がしめすように回答者の約8割が中流意識を持っている。

表2

低　流	中流の下	中流の中	中流の上	上　流	無回答
1.5%	8.8%	67.6%	8.8%	0%	13.2%

年齢は，次のように10代，20代が中心となっている。

表3

10　代	20　代	30　代	無回答
24.5%	67.6%	6%	1.5%

職業の内訳は次のようになる。仕事を持たない人が半数近くを占めている。

表4

学　生	会社員	自営業	教　師	無　職
26.5%	17.6%	2.9%	5.9%	47.1%

調査票の配布・回収は日本語教師の方にお願いして，1994年8月に行った。

3．言語生活

シンハラ人の言語生活・言語行動からどのようなことがわかるであろうか。調査対象者数や調査項目の表現の違いにより厳密には比較できないが，目安として，任（1993）を利用する。

まず，集会や会議に参加するのが好きかという項目に対して，「はい」と答えた人は32.2%，「いいえ」と答えた人は54.4%，「わからない」と答えた人は13.2%であった。「はい」と回答した者の割合は，韓国人の38.5%を下回るが，在日外国人の29.3%，ドイツ人の21.6%を上回り，日本人の9.3%を遙に上回る。ところが，「いいえ」と回答した者の割合も高く，日本人の50.1%と近い割合を示している。日本人の回答は否定的な点で一貫しているのに対して，シンハラ人の回答は分裂している。集会や会議というのはそこで話される内容

によって関心度は変わりうるし，発言を求められる可能性があるかによって参加することに対する態度が異なりうるというように，どのような要因を重視するかによって評価は違ってくる。更に調査する必要がある。

次に，対人行動において緊張度の高い場面においてはどうであろうか，知らない人と話をするのは好きかという設問に対して，「はい」と答えた人は71.2%，「いいえ」と答えた人は2.9%，「わからない」と答えた人は5.9%であった。任（1993）は「見知らぬ人に気軽に声をかけるか」という項目に関して，韓国人（26.9%），日本人（18.0%），ドイツ人（60.0%），在日外国人（55.3%）という値をあげている。設問の表現は異なるが，シンハラ人はドイツ人よりも更に高い値を示している点と，日本人との差が顕著である点は注目に値する。

更に，対人行動において緊張度の低い場面でも，シンハラ人は活発な言語行動を示す。近所の人と話をするのが好きかという設問に対して，「はい」と答えた人は86.8%，「いいえ」と答えた人は4.4%，「わからない」と答えた人は8.8%であった。任（1993：155）は「近所の人とのおしゃべりは好きか」という項目に関して，在日外国人（51.9%），韓国人（44.2%），ドイツ人（39.4%），日本人（11.9%）という数字をあげている。シンハラ人の近所づきあいの活発さは群を抜いており，日本人との差が顕著である。スリランカでは，立ち話などをして話に興じる姿をよく見かけるのは普通の光景である。一方日本に留学で来ているシンハラ人に日本人とのコミュニケーションはどうかと聞いてみると，近所の人とは全然話をせず，日本人は冷たく感じると言っている。

シンハラ人は情報交換が活発であるが，人と話すときに問題になるのが話題である。そこで，「初対面の人と合ったとき，始めにどんなことを知りたいと思うか」ということを尋ねた。回答率の割合の高いものから順にあげると，「職業」（31.3%），「家族の話」（19.6%），「学歴」（16.1%），「故郷」（16.1%）となった。

スリランカでは観光産業が一つの大きな産業であり，外国企業の進出も増えている。ビジネスや観光では，英語ができれば通常の用は足せるようになっている。このような状況においてシンハラ人の意識を見るために次のように尋ねた。「スリランカにいる外国人はシンハラ語・タミル語を話せるよう勉強すべきだと思いますか」。この項目に対して，「そう思う」と回答した人は32.4%，「ややそう思う」と回答した人は32.4%，「そう思わない」と回答した人は

32.4%，「わからない」と回答した人は2.1%であった。前二者を合計すると64.8%の人が肯定的に回答したことになる。これは，調査対象者が居住するコロンボという都市の性格に起因するものと考えられる。経済・政治の中心地であるコロンボでは，いい職業に就く上で英語能力は必須であり，英語を使う必要性が他の地域と比較すると格段に高い。その上，外国人の居住率がもっとも高く，外国人観光客も多いのである。また，「ややそう思う」という回答率と「そう思う」という回答率が同じになっているが，外国人との接触率の低い農村に住んでいる人に同じ項目を聞いた場合には「そう思う」と回答する割合がもっと増えるのではないかと予想される。

英語は，イギリス植民地時代から1948年独立以後も1956年まで公用語であった。独立前からの「スワバーシャー（自国語）」運動，1956年の「シンハラ唯一」政策を通じて[2]，1960年以降，スリランカ人の母語が時代の要請に応える形で広範な機能を獲得した。その結果，植民地時代と比較すると，英語の経済的・政治的・社会的・文化的機能は大きく減じられた。しかし，依然として英語能力は，その人の教育的・社会的背景の指標となっている。80年代以降の民族紛争の激化による将来に対する不安と80年代末の市場経済政策の推進は，国際語としての英語の重要性に再び人々の目を向けさせることになった。このような流れの中で，英語に対する意識をめぐっては，「スワバーシャー運動」世代と現代の10代，20代の若い世代との間には大きなギャップが存在するものと考えられる。

この変化の中に生きている人たちが英語に対してどのような意識を持っているかを知ることは重要である。そのことは，日本語に対する意識を考察する上でも参考になるはずである。そこでまず，英語が好きかと尋ねた。それに対して「好き」と答えた人は91.2%，「好きではない」と答えた人は2.9%，「どちらでもない」と答えた人は4.4%であった。英語に対して率直に肯定的な態度を表明している。

英語に対する態度を形成する要因として使用頻度があげられる。英語を使う機会があるかという設問に対しては，「ときどき」と答えた人が41.2%，「よく」と答えた人が38.2%，「全然ない」と答えた人が20.6%であった。使用する機会が多ければ多いほど，その言語への親近感が増すわけであるから，その言語に対する態度も自ずと肯定的になる。

英語を学習する理由について尋ねた。英語を学習する目的を選択肢の中から3つ選ばせた。選択した割合の高いものから順に，「いい教育を受けるため」

（41%），「いい仕事を得るため」（27.6%），「海外旅行のため」（19.4%），「ビジネスで顧客を増すため」（11.9%）という結果になった。

シンハラ人の言語使用に関して知るために，家族内でどのような言語を使っているかを尋ねた。家族内でシンハラ語のみ使用する人の割合は70.6%，シンハラ語と英語の二言語を併用する人の割合は25%，無回答は4.4%であった。複数の言語が使われる社会といっても，家庭内でのコミュニケーションに関して言えば単一言語状況が通常の姿だと言えよう。

二言語併用者の使用言語の選択状況はどうであろうか。二言語併用者のうち，家族全員とシンハラ語と英語の両方を使用する人の割合は35.3%（但し，17.6%は使用人とはシンハラ語のみ使用）である。両親と兄弟姉妹とはシンハラ語と英語を併用するが，祖父母とはシンハラ語のみ使用する人の割合は23.5%，家族の中の一人とのみシンハラ語と英語を使用するが，他の者とはシンハラ語のみ使用する人の割合は41.2%である。この内訳からわかることは，家族の誰とでも二言語を併用しているのは3割に過ぎず，他の人は相手に応じて使い分けているということである。家族内において英語を使うか使わないかは，相手の英語能力や英語に対する態度や話す話題等に左右されるであろう。

英語の使用状況に関して更に詳しく尋ねた。「誰と」話すかという項目に対しては，外国人観光客，外国人の友人，語学の先生，学校の先生，友人，知り合い，教養のある人，職場の人，英語を話す人，顧客という回答であった。「どんな場面で」という項目に対しては，会社の面接試験，友人と会ったときや電話で話すとき，職場，シンハラ語で話せないとき，教室で習っているとき，という回答であった。「どこで」という項目に対しては，外，外国銀行，大学，学校，教室，友人と会う場所，家，どこでも，という回答であった。「どんな話題か」という項目に対しては，そのときそのときによって変わる，勉強のこと，日常生活のこと，将来のこと，仕事のこと，何でも，という回答であった。

シンハラ語話者の二言語併用に関する論文には，Fernando（1981）がある。社会的階層・ライフスタイル，英語能力等に基づき，二言語併用のタイプを3つに分けて，その言語的特徴について静態的な手法で考察している。今後必要な研究課題は，具体的な接触場面における談話を，相手，場面，話題，場所などの変数を考慮しながら，動態的に考察することであろう。

4．日本語学習

日本人との接触度や日本語学習の程度は日本語と日本人のイメージを形成す

る上で大切な要件となる。そこでまず，来日経験の有無を尋ねた。回答の割合は，「ある」（19.1%），「ない」（67.7%），無回答（13.2%）であった。

日本語を話す機会はあるかという項目に対する回答率の割合は，「全然ない」（8.8%），「わずか」（20.6%），「ときどき」（39.7%），「よく」（17.6%），無回答（13.2%）となった。この場合，話すといっても，日本語教室という場面に限られているようである。

アンケートの被調査者は全員日本語学習歴2年未満であった。彼らの日本語能力の実力の目安として，日本語能力試験のどの級に合格しているか尋ねた。回答率の割合は，「4級合格」（20.6%），「3級合格」（22.1%），「受けたことがない」（45.6%），無回答（11.8%）となった。5割弱を未受験者が占めたのは，学習期間が1年にも満たなく受験機会がなかったためである。初級レベルの学習者が約4割を占めているのも，学習歴2年未満ということから当然の結果であろう。

Aレベル試験における外国語の受験者数は，表5が示すように日本語がフランス語に次いでいる。フランス語の受験者数が横這いなのに対して，日本語の受験者数は順調に増加し続けており，数年後には日本語がフランス語を追い越す可能性がある。

表5　Aレベル試験受験者数（宮岸：1996の資料2の一部）

	90　年	91　年	92　年	93　年	94　年
フランス語	200人	274人	258人	287人	281人
日　本　語	33人	42人	67人	75人	130人

受験者数が増加している理由を知るために，現在の日本語学習の動機について尋ねた。回答率の割合の高いものから順に，「仕事・勉学に役に立つ」（28.7%），「友人を作るのに役に立つ」（23.5%），「仕事・勉学に必須である」（20%）となった。

将来，日本語が役に立つかという項目に対しては，「役に立つ」と回答したものの割合は82.4%，「役に立たない」と回答したものの割合は4.4%，無回答は13.2%であった。

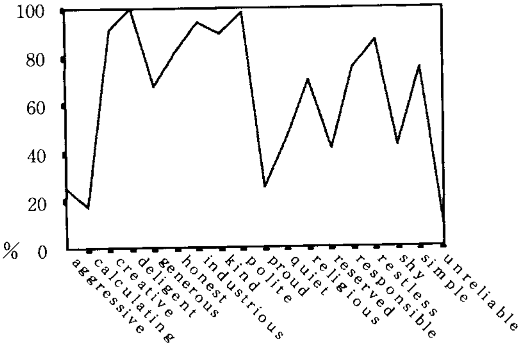
「役に立つ」と回答した人に，将来どのようなことで日本語が役に立つかを回答させた。回答は，「仕事・教育」（35.2%），「日本人と会う機会がある」（35.2%），「多くの情報を得ることができる」（20%），「中等教育機関の

教師になる」（7.6%），「大学の日本語教師になる」（1.9%）という順の割合で多かった。仕事で役に立つと回答したものの割合を集計すると，4割を越える。回答者の半数が失業中というデータと併せて考えると，日本語学習は経済的な動機に裏付けられているということがわかる。一方で注目すべき点は，「日本人と会う機会がある」と回答したものの割合が3割を越えているという点である。このことと，英語学習の理由として英語母語話者との会話があげられていない点とを考えると，スリランカ社会における日本語の機能と英語との相違点は明らかである。相違点というのは，日本語は外国語であるが，英語は外国語ではないということである。英語は国外との関係で言えば，国際語としての機能をもちろん持っているが，国内においては就職・教育を媒介にして国内における社会的上昇を可能にする手段である。この点において，英語は外国語ではないのである。対照的に日本語は，そのような社会的プレステージはなく，英語と比較すると勉強しなくても生活に影響はない。要するに外国語なのである。生活に影響はないという点で，学習者の多いフランス語も同じである。しかし，フランス語学習者は，その多くが二言語併用者（シンハラ語・英語）であるという点と，女性が大部分であるという点で日本語学習者とは異なる。特に後者の点は，フランス文化に対する女性の憧れを反映している。フランス語には，日本語にはないファッション的機能が存在するというわけである。

5．日本人のイメージ

シンハラ人の日本人に対して持っているイメージはどのようなものであろうか。表6は18の評価語に対して「そう思う」（ややそう思う」という肯定的な回答を集計して出したものである。

表6



上位５つの評価語は，次のようになる。

(1) 勤勉な（100%）
(2) 丁寧な（98.5%）
(3) 熱心な（94.1%）
(4) 創造的な（91.2%）
(5) 親切な（89.7%）

マスコミで伝えられる日本に関する主要なニュースは，経済援助にかかわる話題である。熱心によく働き，創造的な仕事をする日本人のイメージと経済援助を通じてスリランカをよく助けてくれる日本人のイメージが伺いしれる。

下位の評価語は次のようになる。

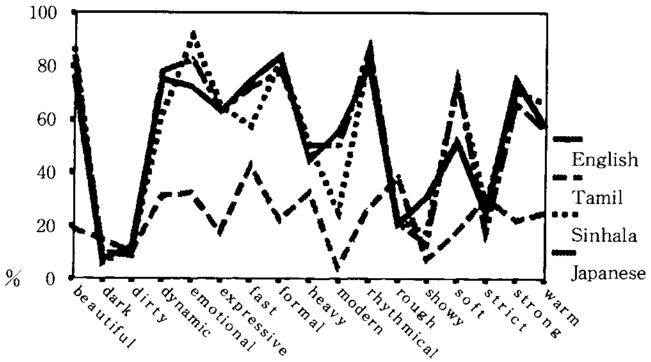
(1) 信頼できない（8.8%）
(2) 計算高い（17.6%）
(3) 攻撃的な（25%）
(4) 高慢な（25.4%）

経済援助の裏にある日本の意図をどのように考えているのかは，この結果からは分からないが，「攻撃的な」「高慢な」というマイナスイメージの項目が比較的高いのは気になるところである。

6．シンハラ語，タミル語，英語，日本語のイメージ

言語に対して持つイメージは，言語を学習する動機や言語使用の選択と関連がある。ここでは，言語にかかわる18の評価語を用い，被験者に判定してもらった。その結果が次の表である。

表７



言語のイメージに関する18の評価語のうち，「そう思う」と「ややそう思う」という回答を集計したもののうち，上位，下位，それぞれ5番目までの評価語を次にあげる。

まず，英語のイメージに関する回答率の高い評価語は，上から順に，

(1) 規則的な（83.8％）
(2) リズミカルな（79.4％）
(3) 美しい（76.5％）
(4) 早口（75.0％）
(5) 力強い（75.0％）

となる。プラスイメージの評価語が占め，英語に対する評価は肯定的である。日本語に関する回答率の高い評価語は，

(1) リズミカルな（86.8％）
(2) 美しい（83.8％）
(3) 情緒的な（82.4％）
(4) 動的な（77.9％）
(5) 規則的な（77.9％）

となる。英語に対する上位評価語にはない「情緒的な」というプラスイメージの評価語が3番目にあげられ，全体的に日本語に対する評価は肯定的である。日本語が好きかという項目に対する回答率の割合が，「はい」（86.8％），「いいえ」（1.5％），無回答（11.8％）ということからも，肯定的な態度は裏付けられる。

母語であるシンハラ語に対する評価は，次のようになる。

(1) 情緒的な（91.2％）
(2) 美しい（86.8％）
(3) リズミカルな（85.3％）
(4) 規則的な（82.4％）
(5) 柔らかい（73.5％）

見ての通り，評価語全てがプラスイメージである。シンハラ語が好きかという設問に対して，全ての回答者が「好きだ」と答えていることからも，この肯定的な態度が裏付けられる。シンハラ語に対する評価が英語・日本語に対す評価とは異なるのは，両言語の評価語の上位にあがっていない評価語「柔らかい」があがっている点である。一方，シンハラ語と同じく公用語であるタミル語に対する評価語上位5つは，

(1) 早口（42.6%）
(2) 荒い（38.2%）
(3) 重い（32.4%）
(4) 動的な（30.9%）
(5) きつい（30.9%）

となる。マイナスイメージの評価語とプラスイメージの評価語が混在しており，プラス評価では一貫していないのが，他の言語に対する評価とは異なっている点である。また，「わからない」と回答したものが非常に多いのも際立っている。被験者の中でもタミル語を学習したことのある人が5名だけだということからみても，「わからない」と回答した人が多いのは頷ける。しかし，スリランカのテレビ・ラジオ放送では番組がタミル語でも放送されているので，タミル語を耳にする機会が頻繁にあるはずです。日本語以上にタミル語を耳にする機会がありうるにもかかわらず，評価を放棄しているのはタミル語に対する否定的なイメージを裏付ける態度だと言えよう。

次に，回答率の下位の評価語を見てみよう。英語の場合は，

(1) 暗い（7.4%）
(2) 汚い（11.8%）
(3) 荒い（20.6%）
(4) きつい（25.0%）
(5) 派手な（30.9%）

となる。

日本語の場合は，

(1) 汚い（8.8%）
(2) 暗い（10.3%）
(3) 派手な（13.2%）
(4) きつい（17.6%）
(5) 荒い（22.1%）

となる。英語・日本語ともマイナスイメージの評価語で占められている点で共通しているが，両者の違いは「派手な」という評価語の割合である。シンハラ語を使わず英語を使っている人に対する印象というのは，英語ができるのを見せびらかしている，お高くとまっているという否定的なものである。特に女性の場合，英語を話しているときのトーンは，シンハラ語と比べて一段と高く，甲高く聞こえる。このような理由で，「派手な」という印象をもつのではない

だろうか。

シンハラ語の場合は,

(1) 暗い(5.9%)

(2) 汚い(11.8%)

(3) 派手な(17.6%)

(4) 近代的な(25.0%)

(5) きつい(27.9%)となる。

タミル語の場合は,

(1) 近代的な(4.4%)

(2) 派手な(7.4%)

(3) 汚い(10.3%)

(4) 暗い(14.7%)

(5) 情緒的な(17.6%)・柔らかい(17.6%)

となる。この2言語には「近代的な」というプラスイメージの評価語が上位にあげられているのに対して,英語・日本語にはあげられていない。このことは,日本という科学技術の発達した国というイメージと,先進的な情報にアクセスできる英語の持っているイメージの反映であろうか。また,タミル語に関する評価語に,プラスイメージの評価語「情緒的な」「柔らかい」があがっている。これはタミル語に対する無関心さや否定的な態度の現れであろう。

7. まとめ

今回の調査は,コロンボ近郊に居住する中流意識を持つ10代・20代が中心のシンハラ仏教徒の日本語学習者を対象にした非常に限定されたものであった。日本の仏教に対する関心や親近感,多くの日本人僧侶がスリランカを訪れることなどから,日本語を学ぶ僧侶は非常に多い。多くの僧侶に同様な調査を行えば,今回の結果とは異なる傾向を示したかもしれない。調査票の質問項目に関して言うと,不備な点がいろいろあった。それら不備な点を改善し,今回,調査対象にできなかったタミル人,バーガー,ムスリム徒,シンハラキリスト教徒など帰属意識の異なる人々,日本語学習の経験のない人々,中・上級レベルの日本語能力の人々,日本に滞在しているスリランカ人,コロンボ以外の地域の人々を対象に調査を行うことが今後の課題として残っている。

付記

調査票の配布・回収を快く引き受けていただいた大使館日本語講座とマハラガマ・ナショナル・ユースセンターの日本語教師の方々に，この場を借りて厚くお礼申し上げます。

なお，本研究は，1994年度の長岡技術科学大学開発教育研究振興会の諸外国産学共同教育研究実情調査等助成の下で行われたものである。

注

1　ここにあげたデータは加納（1993）と宮岸（1996）による。特に，中等・高等教育機関や私的機関に関する最新の情報と日本語教育の問題点については宮岸（1996）を参照。

2　1956年のシンハラ語公用語法の及ぼした影響についてはGair（1983）を参照。

参考文献

井上史雄，「方言イメージの評価語」『東京外国語大学論集』30，1980
井上史雄，「方言のイメージ」『言語生活』34,1980
加納　満，「ケラニア大学における日本語教育」国際交流基金報告書，1993
宮岸哲也，「スリランカにおける日本語教育の現状と課題」報告書，1996
真田信治，『社会言語学』桜楓社，1992
任　栄哲，『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版，1993
「変容する日本の方言」『言語』95．11別冊　vol.24，no.12．大修館書店，1995
Chitra Fernando，“English and Sinhala bilingualism in Sri Lanka.” Language in Society. 6，341－360，1977.
James W. Gair，“Sinhala and English: The Effects of A language Act.” Language Problems and Language Planning 7. 1，43－59，1983.
S. V. Kasynathan and N. P. Somasundaram，“Bilingualism Among Tamils in Sri Lanka: English and Sinhala Bilingualism in Sri Lanka. “Sri Lanka Journal of Social Sciences. vol.4，no.1，55－77，1981.